

まえがき

最近、新聞を広げるたびにTPPや食品の安全性などの記事が目飛び込んできません。信じられないような海外での食品加工の現実を目の当たりにする一方で、ウナギやクルマエビが手の届かない食べ物になりつつある寂しさを感じたりします。

TPP交渉をめぐる難しい駆け引きの様子は迫力がありますが、それ以上に、TPPを前に、日本の農業に次々と新しい動きが現れていることに驚かされます。競争力を高めるために法人化したり、逆に企業が農業分野に進出したり、東南アジアでコシヒカリを作る日本の農家も現れてきました。

国内ではあまり実感できませんが、世界的な食料事情は悪化の一途をたどっています。特に人口が増え続ける途上国での食料や水の確保は深刻です。当然、そこには食品の安全性の問題も含まれます。日本の農業が培ってきた安全性、効率性、そして高品質。農産物を市場に安定して供給する技術もそうです。

これらはどれをとっても、世界的に注目されるべきレベルです。言い換えれば、世界はそうした日本の農業や農産物を待っているのです。

二〇一一年に発生した東日本大震災では、流通の混乱により食品や燃料の入手が難しくなりました。原発事故の影響は放出された放射性物質ばかりでなく、節電が社会的な現象になり、首都圏の電車の運行にまで大きな影響が出ました。社会の効率化や利便化が進む一方で、それがいかに脆弱になっているかが改めて浮き彫りにされました。

社会経済の変化の中で、すっかり取り残されている感のある日本の里地里山。じつは、水も食べ物も自然もとても豊かです。二〇一四年八月に発表された内閣府の「農山漁村に関する世論調査」では、都市に住む人の三一・六%が「農山漁村に定住してみたい」とする結果が出ました。前回調査（二〇〇五年）の約一・五倍で、逆パターンの農山漁村から「都市部に移住したい」という割合（一九・七%）を大きく上回りました。

大震災をきっかけに里山地域の価値が見直され、社会が少しずつ確実に変化しているといえるでしょう。

さて、本書共著者の鈴木渉さんは国連大学で「SATOYAMAイニシアティブ」に関わり、国内外の「SATOYAMA（里山）」を支援するネットワークづくりを展開しています。誠実で優しいパーソナリティは、なるほど、内外の初対面の方や過

疎地のご年配にも人気があるはずだ、と納得してしまいます。

国連大学には、石川県金沢市に「いしかわ・かなざわオペレーティングユニット」という支所があり、能登地域の生の情報が飛び込んできます。この地域を訪れる以前、彼は「過疎高齢化で消滅する中山間地域ではなからうか……」という悲観的なイメージを抱いていたそうですが、実際に訪れてみると、「元気な高齢者がずつと現役で活躍している姿に感動しました！」と話してくれました。海外からもどると、「調べれば調べるほど、日本の里地里山、里海のような農山漁村地域が海外にもたくさんあるんですよ！」と、熱く語り続けるキャラクターです。

今の便利な社会もただかここ数十年のものであって、このまま将来も続くかどうかはわかりません。実際に、人間の生活もその基盤となる「生物多様性」も荒廃し、そろそろ限界に達しようとしています。

SATOYAMAは、たんに昔ながらの農村景観を指しているものではありません。過去の自然との共生の姿に懐かしくて新しい未来像を見出し、持続可能な社会を創ろう、とする試みが「SATOYAMAイニシアティブ」です。

本書は、鈴木さんが「SATOYAMAイニシアティブ」を通じて得た出会いや情報を横系に、経済評論家の私が世界と日本が抱える経済問題やTPPなどのホットな

情報を縦系に、できるだけわかりやすくまとめたものです。農業とTPPに関する良書は多数ありますが、本書では、それらに加えて生物多様性や地域の持続可能なランドスケープ管理、さらに国際的な動きについても詳しく紹介しました。

世界は今、リスクとチャンスが隣り合う大変化の時代の真っただ中にあります。TPPはその一部分でしかありません。大切なことは、私たちは選択肢をもっともっと広げることであって、狭めることではありません。

本書が日本農業の「多様性」を高め、世界にその真価を認められる一助となることを願っております。

二〇一四年一〇月

中島孝志

儲かる農業をやりなさい！◎もくじ

序章 「儲かる農業」をやりなさい! 13

「自然栽培」と「慣行農業」は対立しない 14

TPPをチャンスに変えるために 21

世界中どの国も農業を保護している 28

第二の開国「TPP」 33

第一章 食品偽装はなぜ起きたのか 37

赤坂の寿司店主の悲鳴 38

食品偽装の深刻な事情 40

サバ、タコ、イワシもあぶない 44

絶滅速度が最大一〇〇〇倍 46

ウナギはもうもどって来ないのか 48

野菜が美味しくないのはなぜか 49
誰が非難できるのか 52

第二章 農業の現実 55

就活としての農業 56

きれいな事で農業はできない 59

食卓から消えた食材 62

農業の生産性 64

小規模農家の持ち味とは 69

どう作るか、どう売るか 71

スーパーが「売っているもの」——流通革命がもたらしたもの 73

第三章 「奇跡のリンゴ」が起こした風……………77

- 肥料も農薬もいらない!? 古くて新しい農業 78
- 菌を殺すのではなく増やす⇨逆転の発想 81
- 見栄えがよくない農作物が売れるようになった 83
- 「美味すぎる米」の功罪―塩むすびが売れる理由 84
- 美味しすぎて糖尿病が増える!? 86
- 有機農業の虚構と実力 87
- 有機でなくても安全な野菜はできるか 90
- 有機農産物とオーガニックは別物? 91
- 日本がどうしても取り組めない「窒素」 95
- 化学肥料と農薬を超える古くて新しい技術 98
- 微生物が拓く! 未来の農法 100
- 種が危ない! 農業の基本はタネにある 105
- 種子業界を席卷する権利ビジネス 106
- 種子の「いのち」が脅かされている 108

第四章 新しい農のかたち……………117

- 固定種とF1種とのベストマッチングとは 111
- 離島―固定種生産の歴史と可能性 113
- 生物本来の力を使えばこんなに美味しくなる 118
- 生物多様性が生産性を上げる 121
- TPPで変わる農産物のマーケット 124
- 慣行農法、有機農法、自然栽培は共存できる 126
- ローマ法王にコメを食わせた男 132
- 安売りはしない! 価値を伝える! 134
- 奇才と天才との遭遇 137
- 江戸時代末期と現代が似ている? 山村の荒廃と復興策 141
- 今に生きる二宮尊徳のアプローチ 143
- 「天地の経文」―自然が教えてくれる共生のすがた 145
- 日本列島改造の先駆け、徳川家康 148

江戸の町は世界一清潔なりサイクル都市だった 149
「国内移民」こそ地域復活のカギ 150
お願いしてはダメ 152
よそ者、若者、馬鹿者を呼び込め！ 155

第五章 「世界農業遺産」の意義 …………… 159

FAOの静かな戦略 160
動き出す能登半島 164
「世界農業遺産国際会議」に参加していたキーパーソン 166
「小松市環境王国」の挑戦 168
小松市の名産はトマト 170
不可能を可能にするーオオムギでパンを作った！ 174
地域の農家が生き残る仕組みを作る 177

第六章 リスクの時代を生きるために …………… 181

企業の熱い視線 182
キーワードは「サステイナビリティ」 185
カツオの調査をする食品会社 187
ゾウを守る会社 188
竹で紙を作る 191
「プランB」が求められている 192
付加価値を高めるラベリングとストーリー 196
「SATOYAMA」をめぐる国際的な動き 198

第七章 新しい農業の扉が開いている！ …………… 203

アベノミクスは農業の閉塞を打破できるか 204
新しい農業が時代を変える 206
「田舎から」変わるー限界集落に時代の最先端がある 208

目に見えない「多様性の価値」に着目する	211
否定しないで、選択肢を広げる	213
世界を幸せにする日本の農業	215

あとがき
218